

開館5周年記念特別展

◆時衆の美術と文芸◆

3月10日(日)～4月14日(日)



重要文化財・伝他阿上人真教倚像

京都・長楽寺蔵

もと京都・七条東洞院にあった七条道場金光寺に伝来し、同寺廃絶後、東山の長楽寺に移坐された肖像彫刻群のうちの一軀。近年の修理の際に発見された火葬骨片を納めた五輪塔に「大上人」の銘があり、他阿真教の像と考えられるにいたった。面貌や着衣の襞の扱いに豊かな写実性がみとめられる。

今から約七百年の昔、伊予国の豪族河野氏の一族として生まれた一遍智真は、浄土宗西山派の教学を学んだあと、信濃・善光寺や紀伊・熊野大社などにおける体験を経て、日本全国をひたすら歩き(遊行)、踊り念仏を興行しながら、南無阿弥陀仏の六字名号を刷った札を配る(賦算)日々を生涯つづけました。

一遍の後について教団としての整備をはかったのが他阿真教で、師の亡きあと遊行を継続しますが、やがて相模・当麻道場(無量光寺)に住み(独住)し、遊行上人の地位を第三祖智得にゆずりました。以後、歴代の遊行上人が全国を布教しつづけ、その信奉者は今日では想像もつかないほどの広がりを見せたのです。

かれら遊行に一生を投じた聖とその同行者たちは、当時、時衆と呼ばれました。(宗派としての「時宗」は室町後期からの用語)。時衆には、連歌や能をはじめさまざまな職能に長じた者が多かったため、中世を通じ、時衆の文化はつねに日本の文化の中枢に位置していたといっても過言ではありません。

今回の展覧会では、国宝・一遍聖絵などの伝記絵巻や歴代遊行上人の優れた肖像彫刻、また時衆が残した風雅な文芸作品の数々を中心に、約八〇件の作品を陳列し、時衆の生み出した豊かな文化遺産を公開するとともに、時衆の歴史における近江の国の役割についても紹介します。

特別展の内容

☆展覧会は次のコーナーから構成されます

- (1) 一遍聖絵
- (2) 遊行上人縁起絵
- (3) 遊行
- (4) 踊り念仏
- (5) 名号と賦算
- (6) 列祖のすがた
- (7) 時宗寺院の本尊
- (8) 教団の展開
- (9) 一向俊聖
- (10) 浄阿と四条道場
- (11) 国阿とその事蹟
- (12) 時衆と文芸



一遍聖絵

☆おもな展示作品

国宝・一遍聖絵 巻五・十

神奈川・清浄光寺 京都・歡喜光寺蔵
 一遍の十回忌にあたる正安元年（一二九九）に、一遍の弟といわれる聖戒が描かせたもの。絵は法眼円伊を中心とした工房制作、詞書は当時一流の能書家の手になるとみられる。とくに風景描写の卓抜さは特筆され、鎌倉時代の絵巻物の代表作のひとつ。

彦根市指定文化財・切阿上人坐像 滋賀・高宮寺蔵
 他阿真教の弟子であった切阿上人は、滋賀・彦根市の高宮道場に住し、布教に努力した。この像は切阿の肖像と伝えられ、像内に嘉暦二年（一二三二）に法橋仙賢が制作した旨の墨書があり、これは時衆の肖像彫刻としては最古の銘文。



切阿上人坐像

重要文化財・陸波羅南北過去帳

滋賀・蓮華寺蔵

一遍と同時代の念仏聖一向俊聖が往生した霊地であり、一向派の本山となった米原町・番場の蓮華寺に伝来。鎌倉幕府滅亡時、京都の六波羅探題北条仲時以下四百三十余名が討幕軍に追われ、この地で自害した。
 ときの蓮華寺住職がその名を記し、菩提を弔った記録。



陸波羅南北過去帳

重要文化財・阿弥陀如来立像

滋賀・阿弥陀寺蔵

阿弥陀寺の本尊像。足柄の銘と納入文書により、文暦二年（一二三五）に入蓮を願主として、高名な仏師快慶の高弟行快によって造立されたことがわかる。造像に結像した人物のなかには、京都・大報恩寺の開山義空と第二代澄空の名もみえる。玉眼を入れ、頬の張った理知的で明快な表情、衣のひだの手慣れた彫法が特筆される。時宗寺院の本尊中、屈指の名作。



阿弥陀如来立像

◆町人文化の華——大津祭◆

4月27日(土)PM 5 6月2日(日)



源氏山本祭用見送幕

百子嬉遊図・鳳凰額織織

清代(一八世紀)

中京町源氏社蔵

子供たちが天真爛漫に遊ぶ姿を描いた図は、吉祥の構図として中国の人々に好まれました。絵画としても描かれましたが、染織品も作られたようです。曳山には、異国風を好む傾向があり、この構図はそうした嗜好に合う作品でした。子供たちの遊びには、日本に共通する部分も沢山あり、それだけ親しみがもてたのでしょう。この幕は、享保十一年(一七二六)に新調されました。そして、幕末に全く同じ見送幕を模織しており、青宮用として使われています。

大津祭は、湖国の秋を彩る華やかな曳山祭礼です。

毎年一〇月一〇日、一三基の華麗な曳山が、囃子の音も心地よく、大津町を巡行します。華やかな装飾品に彩られた曳山と、その上で演じられる繊細で簡潔な動きのからくりが人々を魅了し、曳山の上から投げられる厄除けの粽に、熱い歓声が上がります。

大津祭曳山の成立は、今から約三六〇年前の寛永一五年(一六三八)といわれており、そのきっかけは、慶長年間、神社近くに住む塩売治兵衛が狸の面をかぶり木遣音頭に合わせ踊ったことに始まります。この踊りが恒例化し、やがて狸の腹鼓を打つからくりに変わり、そして寛永一五年に三輪で屋台がのる、現在の曳山の原形が誕生しました。

江戸時代大津は、交通の要衝として、大変経済力のある町で、また、京・上方の文化がいち早く吸収できる所でもありました。この豊かな経済と文化を背景として、曳山はより華麗になってゆきます。

大津曳山の装飾で目を引くのは、見送幕をはじめとする染織品です。中でも、ブリュッセル(ベルギー)製タペストリーの見送幕は、祇園祭、長浜祭と大津祭のみに残された貴重な作品です。天井画等の絵画も当時一流の絵師によって描かれました。また、からくりは、全国的にみても早い時期に、曳山に摂取されたもので、芸能文化的に貴重なものです。

今回の企画展では、祭当日はじっくり見ることで、きかない曳山装飾の数々や、大津祭を育んできた人々の歴史を伝える資料を一同に会し紹介します。

企画展の内容

☆ 展覧会は次のコーナーから構成されます

- (1) 大津祭の成立
- (2) 曳山を彩る装飾
- (3) 曳山のからくり
- (4) 曳山を支えてきた人々

☆ おもな展示作品

重要文化財 龍門滝山本祭用見送幕

『イリアス』トロイ戦争物語タベストリー毛綴

(一六世紀)

龍門滝山保存会蔵

曳山は、様々な装飾品で飾られています。最も目を引くのは、見送幕などの染織品です。この毛綴は、一六世紀後期、現在のベルギーのブリュッセルで製織されたタベストリーの一部を見送幕にしたものです。ブリュッセル製タベストリーは、月宮殿山にもあり、同じ題材の別の部分です。描かれているのは、ギリシヤ詩人ホメロスの叙情詩『イリアス』のトロイの木馬の



龍門滝山本祭用見送幕(部分)



西王母山本祭用胴懸

場面の一部です。ヨーロッパでタベストリーは、実用品であり装飾品として利用されましたが、大変貴重なものであり宮廷などでしか利用できませんでした。この貴重なタベストリーが、大津祭、祇園祭、長浜祭の曳山に残されていますが、どのようなルートで入手されたかは謎です。

西王母山本祭用胴懸 波濤に龍図絹刺

官服直し 清代(一八世紀)

桃山保存会蔵

龍文様の幕は、多数残されています。中国製のもものは、元宮廷の官服として使われていたものを仕立て直し、幕としたものです。中国では、階級によって服の色や龍の構図が決められており、皇帝が変わるとそれ

までの官服は放出され、これらが日本にも伝来しました。曳山のモチーフとして龍は最も好まれたようで、こうした官服直しが何枚も残されています。西王母山のこの幕は、絹刺という変わった技法で作られた染織です。下地の目に沿って刺繍してゆく緻密な技法で見織物のように見える作品です。

四季草花図殺生石山天井画 松村景文筆

板絵著色 六面 享和元年(一八〇一) 柳町自治会蔵

江戸後期京都画壇で最も人気を誇った四条派のエイ、松村景文による天井画。制作当時、弱冠二三歳であつた景文にとつて、若き時代の金字塔です。

四〇種の草花いすれにも、贅沢に顔料を厚塗りし、なめらかに抑揚を効かせた輪郭線をしつかりと施して、意匠性を重視した草花の描き方をしています。数多い景文作品のなかでも極めて異色な作風を試みながらもその完成度は高く、しかも景文の初期の若描きとして貴重なものです。



殺生石山天井画

学芸員のノートから③

横井金谷の模写―紙本淡彩模本帝都雅景一覽より―

先月、本館では「近世大津の画人たち」という絵画の特別陳列をしました。展覧会を開くと必ず、展示でとりあげた絵師の作品を御所蔵されている方からお問い合わせがあります。なかには、もっと早く知っていたら、展示させていただきたかったのに、と思う作品もあります。今回は、そのような興味深い作品のひとつとして、横井金谷（一七六一―一八三三）の模写（個人蔵）を紹介したいと思います。

金谷は、「近江蕪村」と呼ばれ親しまれているように、一般には、蕪村風を手がける南画家として認知されています。もともと、蕪村に直接師事したことのない金谷は、蕪村の作品を写すことによつて、その作風を学んでいたようです。主なものとしては、「模本奥の細道図」（原本は重要文化財の蕪村画、京都国立博物館蔵）や、「石図・波図」（草津市蔵）があります。

しかし、今回とりあげる金谷の模写は蕪村とは関係なく、また南画のジャンルとも異なり、京都画壇の有力流派である岸派の絵師による、しかも肉筆画ではなく、版本（出版物）を模写したものです。

まず、その版本について大雑把に説明します。タイトルは、『帝都雅景一覽』。東・西・北・南と、二編三巻の四部構成となっており、京都の名所のなかでも、寺院を中心とした風情ある土地が選定されています。その景色（外観）を描くのは、岸駒（岸派総帥）の高弟であり、当時の京都画壇の名家であった河村文

鳳（生没年不明、寛政の文化頃活躍）です。また、清田龍川と頼山陽という、これまた当代随一の詩文家が、その風景に題や賛を付けています（龍川が東、西之部、山陽が北、南之部、編集も同様）。

この本は当初、龍川の企画と編集で進められました。文化五年（一八〇八）の龍川の逝去により、とりあえず東西の部が翌年出版され、あとを受けた山陽によつて、南北の部が同一年に刊行されています。

風俗名所図のような挿絵であった従来の名所図会に比べ、風景画さながらの真景図を挿絵とし、情報よりも鑑賞を優先した、絵画的に質の高い名所図会であるところが、『帝都雅景一覽』の特色です。なお、金谷が模写しているのは、前編のうち東山之部のみです。

この版本を金谷が写した動機は定かではありません。版本の形態に即し、画帖仕立てに模写（現在は貼交屏風に改装）している点や、原本の図様を特にアレンジしていない点を考えると、その姿勢はかなり忠実なものであり、模写とみなすべきものです。落款を見ると、「帝都雅景一覽／金谷道人所蔵」とあり、どうやら、金谷自らの蔵本を写したようです。その気になれば、容易に描ける東山の名所を、しかも版本から模写した事情が気になります。

ともかく、ほぼ忠実な模写でありながら、描かれた風景が、まるで金谷作品になつて注目に値します。原本の存在を知らなければ、その雰囲気は金谷オリジナルとしか思えないほどです。

金谷はただ、自分なりの線描と彩色をしているにすぎないのです。

その何気ないアレンジによる様変わりこそ、実は金谷が誇りたかつたのかもしれない。（横谷賢一郎）

『帝都雅景一覽』東山之部は次の二〇景で構成される。そのうち金谷は次の一〇景のみを模写している。
八坂晴鳩・蓋山過雨・清水寺春霞・※高台秋露
※双林暮月・※長楽新緑・葛原松花・※祇園梅雪
華頂春暎・大和橋雪暎・※永観堂荷花・本光寺夏暎
※聖林夏緑・半山大字・※真如堂夕陽・※黒谷閑昼
鹿谷新翠・※神岡浅霜・南鴨清流・※山嘴春暮



黒谷閑屋（模本）



高台秋露（模本）



黒谷閑屋（原本）



高台秋露（原本）



「帝都雅景一覽」
金谷道人所蔵
（同右印）



「東山奇勝」
（印）金谷図書記

れきはくインフォメーション

6月			5月			4月		
土	29	第120回講座 蓮如上人と近江門徒 13時30分～15時 講師：松岡昭彦(貴宗大谷派名古屋教区化センター主事)	土	25	記念講演会―曳山からくりの背景 13時30分～15時 講師：山田和人(同志社大学教授)	土	27	第119回講座 近江ゆかりの画人たち―文麟・椋嶺を中心に― 13時30分～15時 講師：岩田由美子(滋賀県立近代美術館学芸員)
土	22	ふるさと大津歴史教室 彦根城とその周辺 10時～11時30分 講師：松澤修ほか(朝滋賀県文化財保護協会講師)	土	18	記念講演会―曳山を彩る染織品 13時30分～15時 講師：藤井健三(京都市染織試験場研究員)	土	20	第118回講座 志賀 酒家 淡海と上方喜劇 13時30分～15時
土	15	ふるさと大津歴史教室 山中越えの旧道と壺笠山 10時～11時30分 講師：松澤修ほか(朝滋賀県文化財保護協会講師)	土	11	第118回講座 曳山模型を作ろう！ 10時～11時30分	祝	4	記念講演会―近江の曳山祭 13時30分～15時 講師：木村至宏(本館館長)
土	8	第117回講座 古代楽器のコンサート 10時～11時30分 講師：渡元楽師(古代のメロデーを奏でます)	土	1	ふるさと大津歴史教室 葛川溪谷に文化財を訪ねて 13時30分～15時 講師：山田和人(同志社大学教授)	土	18	記念講演会―近江の曳山祭の概要を丁寧に解説 13時30分～15時 講師：木村至宏(本館館長)
土	1	ふるさと大津歴史教室 葛川溪谷に文化財を訪ねて 13時30分～15時 講師：山田和人(同志社大学教授)	土	25	記念講演会―曳山からくりの背景 13時30分～15時 講師：山田和人(同志社大学教授)	土	27	第119回講座 近江ゆかりの画人たち―文麟・椋嶺を中心に― 13時30分～15時 講師：岩田由美子(滋賀県立近代美術館学芸員)
土	8	第117回講座 古代楽器のコンサート 10時～11時30分 講師：渡元楽師(古代のメロデーを奏でます)	土	1	ふるさと大津歴史教室 葛川溪谷に文化財を訪ねて 13時30分～15時 講師：山田和人(同志社大学教授)	土	20	第118回講座 志賀 酒家 淡海と上方喜劇 13時30分～15時

※講師名を記していない講座は本館学芸員が担当いたします。
※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。

〈企画展〉
町人文化の華―大津祭
4月27日(土)PM～6月2日(日)

収蔵品紹介 23

大津絵 青面金剛

紙本着色 江戸時代
縦四六・〇 横二三・〇

本館蔵 一幅

大津絵といえば「鬼の念仏」「藤娘」に代表され、英雄や美男美女そして滑稽でユーモアあふれた作品が有名です。江戸時代を通じてこうした世俗画が人気を博したのは事実ですが、大津絵の描きははじめは宗教的な画題の作品だったと考えられています。もっぱら仏教の尊像を画題とするため大津絵仏画とよばれるこれらの作品は、街道の土産物というより、主に近郷近在の人々が日常の礼拝に用いるものでした。

青面金剛は、病魔を祓う護法の神です。室町時代から始まった庚申講で本尊とされた神仏は数種類ありますが、江戸時代になって、最も多く祀られたのが青面金剛です。そのため大津絵でも需要があり、数少ない大津絵仏画のなかでも比較的多く残っています。

本図は、半紙二枚を縫いだ縦長の紙に刷毛で黄土を塗り、青面金剛と二童子そして日月・猿・鶏を描きます。日月以下は、徹夜で修行する庚申講の日待ち・見ざる聞かざる言わざる・朝を告げる鶏鳴の意味とされます。大津絵は新しい作品ほど絵が簡略化される傾向があり、本図でも古い作品によく見られた四夜叉がおらず、二童子も後の作品では省略されます。金剛自身も概ね仏教の儀軌通りですが、極めて単純化して描かれています。例えば、逆立つ髪やその中央にある觸摩が、本図では簡単な彩色で表現されていますし、持物の棒も本来体や腕にまとわりつく蛇に代わっています。本図には合羽刷りや版押しなど一般的な大津絵の技法がみられます。表装が改められているため、大津絵仏画の特徴である描表装が失われているのが残念です。

(山崎和宏)

